

どのように性教育を始めていけばいいでしょうか

子どもには、「体の全部が大事だけど、『プライベートパーツ』（胸、生殖器）おしり、口など）は、命や健康にもかかわるところだから特別大事。自由に見たり触ったりできるのは自分だけ」というと分かりやすく伝えることができます。

もし安全でないタッチがあったら、「いやだ、やめて」と言つて離れ、信頼できる大人に伝えることが大事です。肌の露出が多いと性被害にあいやすいとか、性暴力をふるう人は性欲をコントロールできない人などと言われがちですが、権力欲や征服欲から行動する人もいます。うまく回避できなかったとしても、悪いのは勝手に触った人だと繰り返し伝えていくことが大事です。

命の誕生について、赤ちゃんはどこから生まれるの？と聞かれたら、どうしてそう思ったの？とか子どもの知りたいポイントや疑問を聞き返したりするなど、親子で安心して話せる関係性につなげていければと思います。性交についての質問にはどのように答えるかについてお話しします。

「国際セクシユアリティ教育ガイドンス」では、9歳から12歳までの学習目標では、精子が卵子と受精して妊娠することを掲載していますが、子どもには動物や虫の交尾と同様に、人間も性交により精子と卵子があわさり新しい命の誕生につながるという科学的な視点で説明するのが分かりやすいと思います。

思春期になると男の子、女の子は体の特徴が異なってきましたが、このような変化に戸惑うのは発達の自然な過程なので、家族が相談に乗れることを伝えておくといいと思います。好きになる相手が異性の人も同性の人も性別に関係がない人も、恋愛しない人もいることも伝えておきます。女らしさ、男らしさを限定する発言は避けたい方がいいですし、型にはめた「らしさ」ではなく、「その人らしい」性のありようを大切にすることが大切です。

性的なふれあいについてお互いに同意があることを、性的同意（セクシユアル・コンセント）といいます。性的でない普段のコミュニケーションにおいて同意が必要なことを認識し、繰り返し実践することが大切です。

世界にはさまざまな避妊法がありますが、日本では避妊の選択肢が少なく、コンドームのみでの避妊失敗率は2〜18%と高めです。避妊に失敗したときには、緊急避妊薬（アフターピル）があります。海外では薬局で買えますが、日本では婦人科などを受診して購入しなければなりません。私たちは薬局で買えるように求める活動をしており、令和5年11月から一部薬局での試験的運用が始まっています。都内でも協力薬局はありますが、諸条件があり入手のハードルは高いです。

おうちでの性教育には、さまざまな年齢層向けの教材、発達が気になる子向けの教材が出ています。私たちは幼い時から繰り返し性教育を行う必要性があることから、子どもにも分かりやすい「かるた」を制作しました。

性教育とは一方からではなく、子ども・若者からの意見を取り入れつつ、彼らを守るために科学・権利の視点に基づく情報から、行政・地域・医療・教育・家庭が連携し、子ども・若者の健やかな成長をエンパワーする環境を整備することだと思います。

講師紹介

染矢明日香（そめや あすか）

特定非営利活動法人ピルコン理事長。自身の経験から、大学生の頃に性の健康についての問題意識を持ち、民間企業での勤務を経て、性の健康の啓発活動を行う特定非営利活動法人ピルコンを設立。同理事長。公認心理師、思春期保健相談士、緊急避妊薬の薬局での入手を実現する市民プロジェクト共同代表。著書に「マンガでわかるオトコの子の『性』」など。

参考資料

ユネスコ「改訂版 国際セクシユアリティ教育ガイドンス」
性教育、性の健康関連書籍の紹介（NPO法人ピルコンのサイトです）
<https://picon.org/help-line/recommended-books>

